実践報告

「ことばの相談室」活動報告

白井　結[a)]　富井　浩子[a)]　竹内　洋彦[a)]　林　耕司[a)]

a 長野医療衛生専門学校　言語聴覚士学科

The actual condition of children with language developmental disorders using the language consultation room

Yui Shirai[a)]　Hiroko Tomii[a)]　Hirohiko Takeuchi[a)]　Koji Hayashi[a)]

a Nagano Medical Hygiene College

Ⅰ．はじめに

令和４年度、長野医療衛生専門学校附属「ことばの相談室」（以下、相談室と略す）の活動をまとめた。

Ⅱ．活動報告

今年度は、週３回（１回２枠）の開設とし、２枠（１回 45 分）２ケースの相談・訓練を２名の ST が分担し行った。令和４年４月から令和５年３月（令和４年２月は感染症対策のため休室）までの１年間の延べ相談児数は 111 件であった。本報告では新規相談児についてまとめた。

１）新規相談児

10 名（男児７名、女児３名）。

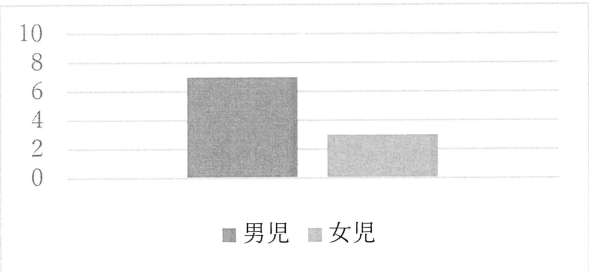

図１　性別内訳

２）居住地

新規相談児 10 名の居住地は、上田市５名、上田市外５名（長野市、小県郡青木村、安曇野市）。

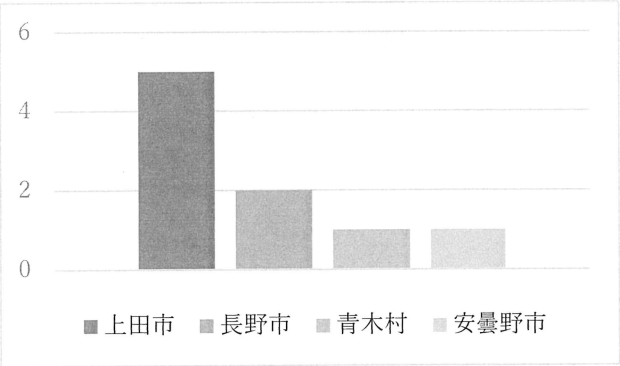

図２　居住地内訳

３）診断名

知的障害（以下、ID と略す）を伴う自閉スペクトラム症（以下、ASD と略す）３名、機能性構音障害３名、診断名無し２名、その他２名〔ID、注意欠如・多動性障害（以下、ADHD と略す）を伴う ASD〕であった。

a 長野医療衛生専門学校
〒386－0012　長野県上田市中央 2-13-27
info@nagano-iryoueisei.ac.jp

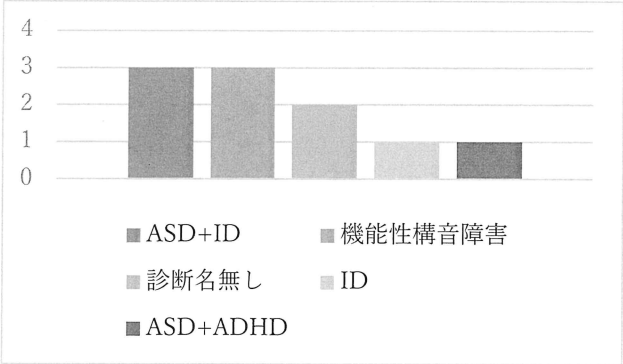

図３　診断名内訳

４）年齢

年齢は８歳１名、６歳３名、５歳２名、４歳３名、１歳１名。

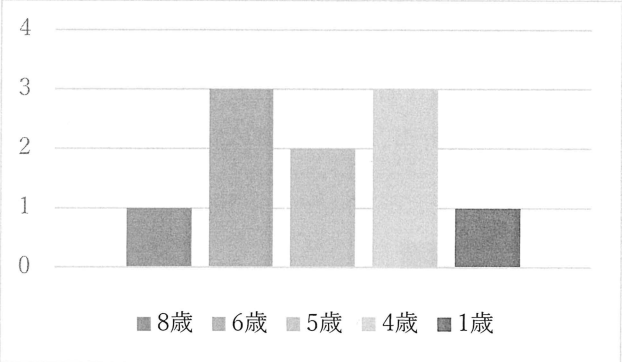

図４　年齢内訳

５）相談内容

「ことばの遅れ」５名、「構音」３名、「コミュニケーション」２名であった。

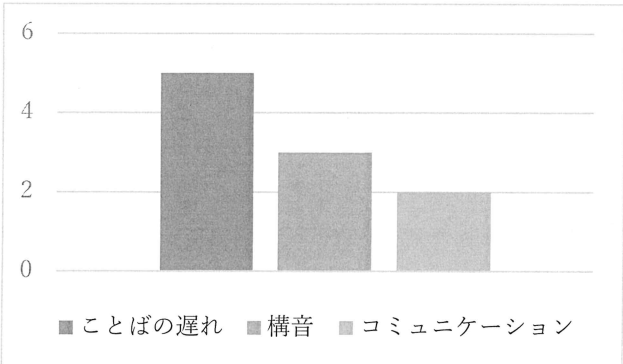

図５　相談内訳

６）訓練

訓練に繋がったケースは６名であった。訓練へ繋がらなかったケースは、自然治癒が期待できるケースや市の発達支援センターへ繋げることができたケースなどであった。

Ⅲ．学生への効果

相談室での相談・訓練は、保護者の承諾のもと、学生が見学している。令和４年度の学生見学の累計数は、54名であった。１年生は「言語聴覚療法セミナー」の授業内で見学を行い、言語聴覚士の小児分野に対する臨床への理解を深めた。２年生は福祉実習の一環として、児と関わる機会を持った。3～4年生は臨床実習に向け、検査や訓練を教員指導のもと行った。その他、長期休みや授業の空き時間を利用して見学を勧めた。徐々にではあるが、相談室を学生への実習教育へ利用することができている。

以下に、学生の見学時の感想を紹介する。「検査場面を見学させてもらった。検査マニュアルを読むだけでは分からなかった検査の様子をイメージすることができた。相談室を見学したことで、先の実習に対する不安を軽減することができた。」

「同じ診断名を持つお子さん一人ひとり、特徴や困り感が違うことを学んだ。教科書で得た一般的な知識を、臨床に活かしていける貴重な経験を積むことができた。」

「お子さんとの関わり方や訓練の進め方を、学ぶことができた。臨床の場では、知識だけではなくお子さんとのコミュニケーションを楽しむことが必要なのだと感じた。臨床実習に向けて、今後も見学を続けていきたい。」

Ⅳ．研究活動

相談室内で経験した症例に対し、相談室担当教員内で定期的に報告・相談を行っている。その中で、訓練成果を得ることができた症例については、

2022年6月に行われた「第23回日本言語聴覚学会 in にいがた」(The 23rd Annual Meeting of the Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists) にて、発表する機会を得た。

以下、学会発表について報告する。

発表テーマは「動画による構音訓練によって歯茎破裂音の産生が可能となった知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害児の一例」であった。

内容：対面の口形呈示では構音獲得に到らなかった自閉症スペクトラム障害児に対し、STの発音による口形の変化等を拡大撮影した動画を訓練で用い、未獲得であった歯茎破裂音の産生が可能となった一例を経験したため報告する。

【対象】CA5:2 男児。

【診断名】自閉スペクトラム症および知的障害。

【評価】CA5:2 の<S-S 法>による評価でコミュニケーション態度良好、症状分類C群。受信3語連鎖2形式可で3歳1ヵ月、発信事物名称成人12語可で2歳1ヵ月のレベル。発話は単語レベルで母音は構音可能。浮動的に産生可能な子音は/m//b/(後続母音が/a/の場合のみ)。検査中は注意持続が難しく口形への注目を都度促す必要があった。

【訓練方法】事前訓練として、2単語(/m//a//m//e/、/t//a//i//k//o/)をST自身の口形を見せながら復唱を促す訓練を2回行った。その後STの両唇破裂音/m/および歯茎破裂音/t/(共に後続母音/a/)について、発語時の口形を拡大撮影した映像と音声を収録した訓練用動画を作成し、タブレット端末で再生提示して発語の反復を促す訓練を、月に2回(計6回)実施した。

【受聴評価】訓練後、録音した本児の訓練前後の音声(訓練前の音声については単語の第1モーラのみを波形編集ソフトで切り出して使用)について、健聴被検者6名による受聴試験を実施し、発話改善評価を行った。

【結果】受聴試験の結果、事前訓練後音声の/m//a/および/t//a/を正答した被検者は0名(両音節とも5名は/a/と回答)であった。一方、動画訓練後音声では/m//a/を/n//a/と回答した被検者が4名、/t//a/を正答した被検者が3名であった。訓練場面では、浮動的に産生されていた/m//b/に加えて、/t/(後続母音/a/)の産生も認められるようになった。動画を用いた構音訓練により歯茎破裂音の産生が認められた。【考察】両唇破裂音でも、目標音の構音方法、場所に近づく傾向が見られ、動画訓練の有効性が示唆された。当初はSTの口形に1音ずつ注目させていたが、動画を用いることで注目すべき対象が口形に絞られたことが未獲得子音の産生に繋がったものと思われた。

発表後、会場内からの質問として「本児の家庭に対し、構音課題を出しているか」(回答：課題は出さず、本児と楽しくコミュニケーションをとる時間を確保してほしいと伝えている)「鼻音に関してはどのような訓練を行っているか」(回答：鼻音は訓練を実施せず動画の視聴のみで獲得することができた) の2点が上がった。

今後の課題として、今回は1症例の結果であるが、今後は症例数を増やしていきたい。また、受聴評価の方法としては、測定回数を複数回とすることや、受聴試験音声呈示をランダムにするなど改善の余地があると感じている。児の発話の録音についても、音質の受聴評価への影響が考えられる。環境の改善を検討する必要がある。これらの反省を、次の研究へ活かしていきたい。

V. まとめ

今年度相談室での活動報告についてまとめた。今後も、相談室開室時からの目的である①言語聴覚士を目指す学生が、校内で臨床に触れ言語聴覚士として働くことの喜び、自信、誇りを得ること②地域との連携を図りながら、言語発達障害を抱えた対象児への発達支援を行うこと　この2つの

目的に沿って、取り組んでいきたい。

また、我々教員の更なる臨床能力向上に励んでいきたい。

本実践報告に申告すべき利益相反はない。

文献

1　白井結, 林耕司, 富井浩子, 坂本真一　動画による構音訓練によって歯茎破裂音の産生が可能となった知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害児の一例　第23回日本言語聴覚学会, 1-6-101, 2022